

理事ご挨拶

柴田 陽三
(編集委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の二期目の理事を拝命致しました。引き続き編集委員会を担当し、本学会の発展のために尽力してまいりたいと存じますので皆様何とぞ宜しく御願い申し上げます。

さて、この1期目に理事として実行致しました業務についてご報告させていただきます。まず、情報発信のスピーディー化と学会員の利便性を向上させるために本学会誌の電子ジャーナル化を果たしました。PDFファイルとしてダウンロードできることはもちろんですが、研究発表の際に使える様にこれらの論文ファイルは部分的にコピーアンドペーストが出来るようにしております。会員各位におかれましては積極的にご利用頂ければ幸いです。

続いて、GOTSのPresident Victor Valderrabanoより高岸前理事長宛に、Sports Orthopaedics and Traumatology journal (SOT journal) の査読業務への共同参画の要請がまいり、編集委員会で満場一致で賛成を致しました。松本新理事長のもとで査読委員が

選出される事になっております。査読業務を委託されるとともに、会員の皆様はSOT journalのオンラインアクセスが可能になる予定です。

日本整形外科スポーツ医学会誌はスポーツ医学に関する最新の知見を広める重要な役割を担っております。2020年の東京オリンピックはもう間近に迫っており、情報発信元の本誌の役割を考えると身の引き締まる思いを致しております。編集委員会では、掲載論文の質・量の向上に努めてまいりましたが、その中で、長年、編集委員長を任じておられました中川泰彰先生が任期を全うされ退任をなさいました。先生のご功績に対しこの場をお借りして感謝の念を表します。先生の強力なリーダーシップにより、編集業務を行ってまいりましたが、その理念を引き継ぎ、後任の阿部信寛先生ならびに委員の皆さんと学会誌の一層の質の向上に努めてまいりたいと存じます。今後とも御指導御鞭撻を賜りますよう、宜しく御願い申し上げます。

中村 博亮
(学術検討委員会 担当)

このたび伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させていただくことになりました。名誉であると感じるとともにその重責を痛感しております。本学会の会員の皆様にこの紙面をお借りしまして、ご挨拶を申し上げます。

整形外科は頸部から以下の身体に生じた機能障害を再建する機能再建学であり、スポーツは機能障害を惹起する一大要因であります。スポーツ種目も多様で年齢層、またそのレベルやポジションもさまざまであるため、その対応には整形外科各専門分野の横断的な知識が必要になります。

一方、これまで学会レベルで認定されてきた専門医制度は大きく変わろうとしており、現在日本専門医機構が中心となって立案されてきた新専門医制度は、2017年

度春から後期研修を始める先生方に適用されます。新制度では国民目線から標準的治療を遂行できる医師の養成を目指しており、スポーツ整形外科を専門と志す若い先生方にも、まずは万遍なく整形外科各分野を学んでいただく必要があります。

本委員会では引き続き、研究助成や日本整形外科学会のシンポジウム及びパネルディスカッションのテーマや演者についての提案などを行っていく予定です。本邦における高齢者を含めたスポーツアクティビティの向上、健康寿命増進に寄与できるような活動も考慮し、微力ながら学会の進歩に尽力致す所存ですので、学会員の皆様にはご指導ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

金岡 恒治
(広報委員会 担当)

この度、日本整形外科スポーツ医学会の広報委員会の担当理事に就任させていただきました。若輩者で重責を果たせるか、はなはだ不安ですが、アドバイザーの先生方のご助力を頂きながら尽力させていただきます。

スポーツによる外傷や障害を診療するときには、その病態を選手・家族・指導者に正しく理解してもらえないと根本的な対処にならないことは日々の診療で感じるところです。もしすべての選手、指導者が十分なスポーツ医学の知識を持ち、それを実践することができていれば多くのスポーツ障害は悪化することなく寛解し、未然に予防されているはずでしょう。選手がどのような身体特性を持ち、どのような身体の使い方をすればスポーツ障害が予防され、ひいては競技パフォーマンスも高めることができるのか？ このことを突き詰めていくことが本学会の大きな課題ですが、研究から得られた最新の成果を広くスポー

ツ現場に普及していくことは障害予防のみならず、ひいては本邦の国際競技力を高め、2020年東京五輪の成功にも貢献するものと考えます。

広報委員会では外来診療で使いやすく、選手・指導者に理解されやすいパンフレット“スポーツ損傷シリーズ”を毎年2部のペースで作成し、すでに29部がアップロードされています (<http://www.jossm.or.jp/series/index.html>)。会員の皆様には忙しい外来診療での病態説明にご活用いただき、スポーツ医学の知識を現場に伝える手助けとしていただければ幸いです。スポーツ医学の進歩は著しく、どうしても最新の情報を載せられていないパンフレットも出てきますが、順次アップデートしていく予定です。お気付きの点やご意見がございましたら事務局までお寄せいただければ参考にいたしますので、よろしくご支援、ご協力をお願いいたします。

菅谷 啓之
(国際委員会 担当)

このたび日本整形外科スポーツ医学会の二期目の理事を拝命し、大変光栄に存じますとともに責任の重さを痛感致しております。本学会には1993年に入会して以来、スポーツ選手の肩関節・肘関節障害の治療を自分のライフワークと定め、学会発表や聴講を通じて深く本学会と関わらせて頂いてきました。一時期、膝関連学会を統一するというところでJOSKASと統合された時期もありましたが、やはり現在のようによりスポーツ医科学に重点をおいて独自に活動していくべき学会だと思います。各専門分野における健康スポーツからアスリートに対する対応、さらに専門分野を超えたスポーツ医科学こそが深く関わっていくべきテーマと考えております。特に2020年の東京五輪に向けて、アスリートを如何に外傷や障害から高いレベルで復帰させるかは、我々がスポーツ整形外科の専門医として研鑽を積んでいかねばならない大きな課題であると考えています。

一期目の理事では国際委員会を担当させて頂き、別府諸兄アドバイザー、熊井司委員長に多大なるサポート

を受けながら何とか2年間無事に勤めることができました。本年からは、熊井司先生が新理事になられた関係上、私が担当理事と委員長を兼任することになりましたが、引き続き別府先生にはアドバイザーを、また熊井新理事には委員としてメンバーに入って頂き、新体制もサポートして頂くことになっております。今季からは新メンバーも加わり、JOSSM-USAトラベリングフェローの派遣を中心とするAOSSMとの関係強化、GOTSトラベリングフェローの派遣および受け入れ、JOSSM/KOSSM共催学会の開催を中心に、新旧メンバーと共に頑張っております。本学会の歴史と伝統を踏まえて、上記の3大プロジェクトを通じて本学会員の国際化、とくにglobalな視野を持った若手学会員の育成に特に重点を置いて頑張っていく所存です。浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承しつつ益々発展できますよう誠心誠意努力する所存ですので、どうかご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

加藤 公
(教育研修委員会 担当)

この度、松本理事長による新体制のもと、教育研修委員会担当理事をさせて頂くことになりました鈴木回生病院の加藤 公と申します。

スポーツ医学が医学会のみならず、社会的にも注目されてきている昨今、日本整形外科スポーツ医学会はより一層重要な役割を担うことになっていくものと考えております。

私は以前、広報委員会担当理事、会則等検討委員会担当理事をさせて頂き、本学会の現状や今後の展望について、理事の先生方をはじめ皆様のご意見を賜りながら、調査検討を行う機会を頂いたことがございました。もちろん、教育研修委員会担当の経験はございませんが、これまで前任の先生方が教育研修として、大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナーの開催など様々な形で、スポーツ医学に貢献してこられた功績はよく存じて

おり、引き続き、皆様と協議しながら委員会の運営に努めたいと思っております。今後の展望については、一様ではありませんが、スポーツの振興に伴って、スポーツ医学の必要性が増していることから、医師をはじめトレーナー、理学療法士、スポーツ医科学者やそれらを目指す学生への教育をいかに進めていくかは重要な問題だと認識しております。できますれば、まずは本学会を担うであろう若い医学生や研修医に対するスポーツ教育システム作りを進めたいものと考えております。

そうは申ししても、なにぶん私は微力でございます。松本理事長はじめ各理事の先生方のご指導を賜りながら教育研修委員会担当理事として、本学会の運営に関わることで、本学会の発展のために努力したい所存でございます。何卒よろしく願い申し上げます。

稲垣 克記
(社会保険委員会 担当)

松本秀男理事長による新たな体制のもと、日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させていただくことになりました。日本整形外科学会のスポーツ担当委員も務めさせて頂いております。

近年、トップアスリートや若い世代の一般スポーツ選手だけでなく中・高齢者のスポーツの必要性が求められています。このような社会情勢の中で正しくスポーツ活動を広めスポーツ医学の実践と障害・外傷の予防を研鑽してゆく必要があります。本学会は日本整形外科学会とスポーツに関する最も重要な橋渡しとなる学会と位置づけられています。今後、日本整形外科学会会員やスポーツ専門医が本学会を通してスポーツ選手を実際に現場でいかに活躍してゆくか、そして予防をいかにするか行

政を含め考えていく必要があります。

私は学生時代に国体代表選手であり、また日本代表ナショナルチームの帯同医師として国際試合の舞台で多くのことを学ばせていただきました。近い将来、本学会を通してこれらの現場で活躍出来るスポーツ専門医を育てて行きたいと考えます。また、微力ではありますが社会保険委員会の担当理事として、診療報酬に関する事案に取り組みたいと思います。スポーツ関係の手術や診療報酬が保険上、合理的なものとなるようにし社会の構築にますます寄与できるよう、微力ながら尽くしていく所存です。会員の皆様には、ご指導およびご支援を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

松田 秀一
(メンバーシップ委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させて頂くことになりました。誠に身に余る光栄であり、その責務の重大さを痛感しております。2014年から理事を一期務めさせて頂きましたので、今期が二期目となります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

スポーツ医学における整形外科医の役割が非常に大きいことは論をまちませんが、他科の医師、理学療法士、トレーナーとの共同作業なくては適切な予防、医療を行うことはできません。日本整形外科スポーツ医学会は整形外科が中心となり、スポーツ医学を発展させていく上で非常に重要な意味をもつ学会であると思います。東京オリンピックもいよいよ5年後に迫ってきています。治療だけではなく、予防やコンディショニングなどを含めたスポーツ医学は整形外科だけではカバーできないところもあると思いますが、やはり運動器の専門として整形外科がイニシ

アティブをとってこの分野を牽引していかなければならないと思っています。

今期も引き続きメンバーシップ委員会を担当させていただくこととなりました。本学会がスポーツ医学、医療の発展に寄与するためには学会員の増加およびそれに伴う学術活動の活性化は必須と考えておりますので、是非学会員を増やすことができるように努力していきたいと思っています。それと同時にスポーツ医学というものは様々な分野の人が感心をもっている領域でもありますので、入会審査につきましては十分に慎重に行いたいと思っています。

微力ではございますが、松本秀男理事長はじめ副理事長、理事の先生方のご指導を賜りながら、本学会の運営にかかわって参りたい所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

熊井 司
(ガイドライン策定委員会 担当)

このたび、日本整形外科スポーツ医学会の理事という大任を拝命し、大変光栄に存じております。伝統ある学会の中での責任の重大さを痛感しております。

昨年までは、本学会の国際委員会委員長として菅谷啓之担当理事のもとGOTS/JOSSM/KOSSM Traveling Fellowship や JOSSM-USA Traveling Fellowship の fellow 選出や訪問先との連携、日韓整形外科スポーツ合同会議の開催に関する任務などに従事して参りました。これからも引き続き国際委員会の委員として、各国の学会間での国際交流を通じて本学会員の国際化や若手会員の育成にお役に立てることを大変嬉しく思っております。私自身も2005年にGOTS/JOSSM/KOSSM Traveling Fellow として選出していただき、ドイツ語圏のドイツ、オーストリア、スイス各国を約1か月間研修させて頂きました。スポーツ整形外科に関する技術や学術交流のみでなく、訪問先の歴史や文化、思想に大いに触れることができたことは私にとっての一生の思い出となっており、今なお出会った先生方との交流を続けています。また逆に、我々の日本の歴史や文化を

改めて考えることのできる良い機会だったとも感じております。スポーツ整形外科を介して、異文化を考え多くの人と触れ合うことのできるこのTraveling Fellowshipの存在は本学会の一つの大きな財産であり、これまでの歴史や経緯を踏まえたくて今後もそれを継承しさらに発展させていけるよう一翼を担いたいと思っています。

また、本年度からは同時にガイドライン策定委員会を担当させて頂いております。帖佐悦男委員長のもと、日本整形外科学会と連携してアキレス腱断裂診療ガイドラインの改定作業が進行中であります。アキレス腱断裂に関しては、新たなエビデンスが日々更新されているのが現状であり、整形外科診療における重要性は大きいものと感じています。この改定ガイドラインが正確な最新のエビデンスによる診療指針として活用されるべく、委員の先生方とともに取り組んでいきたいと考えています。

浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承し更なる発展に貢献できるよう誠心誠意努力する所存です。どうかご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

土屋 弘行
(定款等検討委員会 担当)

皆様、本年もよろしくお願い致します。

この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の二期目となる理事を担当させていただくことになり大変光栄に存じます。一期目に引き続きまして、委員会では定款等検討委員会を担当しておりますのでよろしくお願い致します。

前回も申し述べさせて頂きましたが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催へ向けて大いにスポーツ医学への関心が集まり、注目度も高まって来ています。これまで整形外科医は主に手術療法を含む運動器の治療においてスポーツ医学の中心的役割を担ってきました。これからは、これまで以上に理学療法士やトレーナーなどと協力して、スポーツ外傷や障害の予防、スポーツ復帰へ向けたリハビリテーションなど幅広い活動を科学的に検証して、その普及と振興に尽力していく必要があると考えます。そして、本学会の役割は、運動器スポーツ医学に関する既存および新しい検査法や診断法、治療法、治療成績の解析法とその分析結果などを検討する場を提供することであり、優れた研究成果を国内外へ向けて発信することだと思います。このためには充実した

学術集会の開催と本学会の継続的な発展が不可欠と考えます。そのためには、会員数のさらなる増加、若手スポーツ整形外科医の育成、スポーツ指導者を含めた準会員数の増加が必須と考えます。

私の専門領域は、骨軟部腫瘍、小児整形、骨折合併症ですが、小児から青年期にかけてのスポーツに関連した疲労骨折に非常に興味を持って研究しています。そして現在、北陸地方でのスポーツ整形外科の普及、振興、啓蒙に努めています。特にスポーツ損傷予防プログラムの普及に力を注いでおり、ACLプロジェクト、PETを用いた筋疲労の客観的評価とウォーミングアップメニューの確立およびそのアプリの開発などの活動を行っています。これと同時に、北陸地区からのより一層の会員数増加を目指しています。

本学会が、魅力あふれかつ日本のスポーツに係わる全ての人にとって有益な情報を提供できる学会になるよう、そして更なる発展をするように引き続き尽くしていく所存です。何卒、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

石橋 恭之
(将来構想委員会 担当)

この度、日本整形外科スポーツ医学会の理事に再任させて頂き、また将来構想委員会を担当することになりました。本学会の会員の皆様はこの場をお借りして感謝を申し上げますと共に、新任のご挨拶を申し上げたいと思います。

さて、将来構想委員会は元の学会活性化検討委員会です。学会活性化にあたっては、先の就任の際にも述べましたが、学会の本来の主旨である学術活動の活性化が最も重要です。他の診療科同様、整形外科の分野でも細分化が進み、様々な分野の整形外科専門医が一堂に会する機会は少なくなりました。本学会は、各専門分野の整形外科医がスポーツ外傷と障害を多面的・横断的に議論できる場であり、数ある学会の中でもその存在意義はあり、今後も必要な学会だと思います。

しかし、学会の将来構想を考えた場合、やらなければ

ならない事は多々あります。他の国内学会との関連構築、さらに AOSSM（アメリカ整形外科スポーツ医学会）や KOSSM（韓国整形外科スポーツ医学会）など国際関連学会との関係強化、またスポーツ専門医をどうするかといった問題などが挙げられます。これらの課題については、他の理事や代議員、また学会員の皆様方と共に考え、解決していきたいと思っております。

ところでずいぶん先だと思っていた2020年の東京オリンピックももう間近です。スポーツ選手を診療している我々整形外科医の役割は、今後益々大きくなっていくものと思われます。本学会が、若手整形外科医にとって参加したい魅力のある学会になるように、またスポーツ医学の発展に寄与し、より良い医療を提供できるように、微力ながら努力していきたいと思っております。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

田中 寿一
(専門医制度検討委員会 担当)

この度、専門医制度検討委員会理事を拝名いたしました。私にとって前回から再任ということになります。専門医制度が確立されない状況で、特に具体的な方策は提示できない活動でありました。今回は、基盤学会である整形外科学会の専門医制度が固まりつつある動向を見つめ、整形外科スポーツ専門医の立ち位置を確立すべく活動したいと思っております。

しかし、その前に、我々が克服せねばならない大きな課題があります。それは、前回指摘したように、整形外科スポーツ医の現状は、整形外科学会が研修を行い、スポーツ認定医を認定し、その後教育研修の単位取得以外、follow が無い状態の中で、JOSSM から JOSKAS が分離し、2つの任意整形外科スポーツ学会が存在するという歪な現状が依然あります。同じ構成員が複数の学会に所属し、同じ様な発表を繰り返し、学会認定料の他に、各学会への年会費を複数に支払うとい

う無駄があります。このことは、これからスポーツ医を志す若い整形外科医にとって、決して好ましい状態ではありません。この歪な現状は、学会のための専門医であると言わざるを得ません。

一方、このためか、我が国のスポーツ界は、相変わらず民間代替医療に頼っているという状態であり、残念ながら整形外科スポーツ医が、アスリートから信頼を得ているとは到底言えない現実があります。

まず、整形外科スポーツ医を志す若い医師に、真のスポーツ整形外科専門医制度を構築することが必要と思います。今後、前理事長高岸先生をアドバイザーに、日整会と協力し整形外科スポーツ専門医認定・学術活動の一本化を図り、整形外科医が一丸となって、“国民スポーツ”のケアに、国民の信頼をえて、中心的役割を担い医学サポートできる体制を構築できるように、努力したいと思っております。

奥脇 透
(倫理・利益相反委員会 担当)

このたび、日本整形外科スポーツ医学会の理事に再任させていただきました奥脇です。本学会の抱えているさまざまな問題について、松本理事長、並びに西良・筒井両副理事長、そして理事の先生方と力を合わせて取り組んでまいりたいと思います。また再任にあたり、「倫理・利益相反委員会」を前任の丸毛担当理事から引き継いで担当させていただくことにもなりました。微力ながら務めさせていただきます。なお、この度の組織改変に伴う各委員会の見直しにあたって、前職として担当させていただいた「障害検討委員会」が終了となりました。さまざまな課題を残したままとなり残念な思いですが、ジュニア世代のスポーツ障害への対応に関しましては、委員の先生方にはそれぞれのスポーツ現場での活動を継続していただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

さて、「利益相反 (Conflict of Interest: COI)」に

関しては、ご存知のように、すでにさまざまな学会にて開示が求められてきています。本学会でも、先日、久保会長のもと、京都で開催された第41回日本整形外科スポーツ医学会学術集会にて、発表時にCOIの開示がなされていまして。「倫理・利益相反委員会」は、これまでの「倫理委員会」に「利益相反」関連事項を加えた形で設置されました。そして丸毛前担当理事のもと、利益相反に関する指針、細則およびQ & Aが策定され、これらに関する申請書、申告書等の様式の整備が行われてきました。2016年1月からはCOIの申告が本格的に始まります。研究者にとっては、COIを正確に申告することで透明性、公明性を示すことが求められています。多少煩雑さが伴いますが、本学会のさらなる発展のため、是非とも委員の先生方のご協力およびご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。